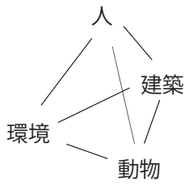
循環の門
- 修繕循環建築 -

本提案は、宮島の鹿・人・環境の関係を修繕しながらつなぐ「修繕循環建築」の考え方に基づく。建築には地元産の木材を使用し、釘を使わない伝統構法を採用することで、容易に修繕・再構築が可能な設計とする。さらに、ゲート下部には鹿の糞や食べ残しを堆肥化する回転式コンポストを組み込み、鹿が通るたびにコンポストが動き、土壌が育まれる仕組みを作る。生成された土は鹿が食べられる植物の生育に利用され、環境・動物・人の関係を再生する。建築が自然とともに変化し、修繕を通じて人々の関与を引き出すことで、「和」は固定された形ではなく、関係性の中で循環し続けるものとして表現される。

修繕循環としての和

本提案では「和」を、固定された形ではなく関係性が維持・変化し続ける状態と定義する。朽ち、修繕されながら人・環境・動物が関わり合うことで、新たな調和が生まれる。継続的な循環としての和。



広島県宮島

宮島の鹿はかつて神の使いとされたが観光客の餌やりにより自然の食性が乱れ、ゴミ漁りや健康被害が発生。現在は「野生動物としての共存」へ方針転換しているが、観光と生態系のバランス調整が大きな課題となっている。

コンポストによる循環とつながり

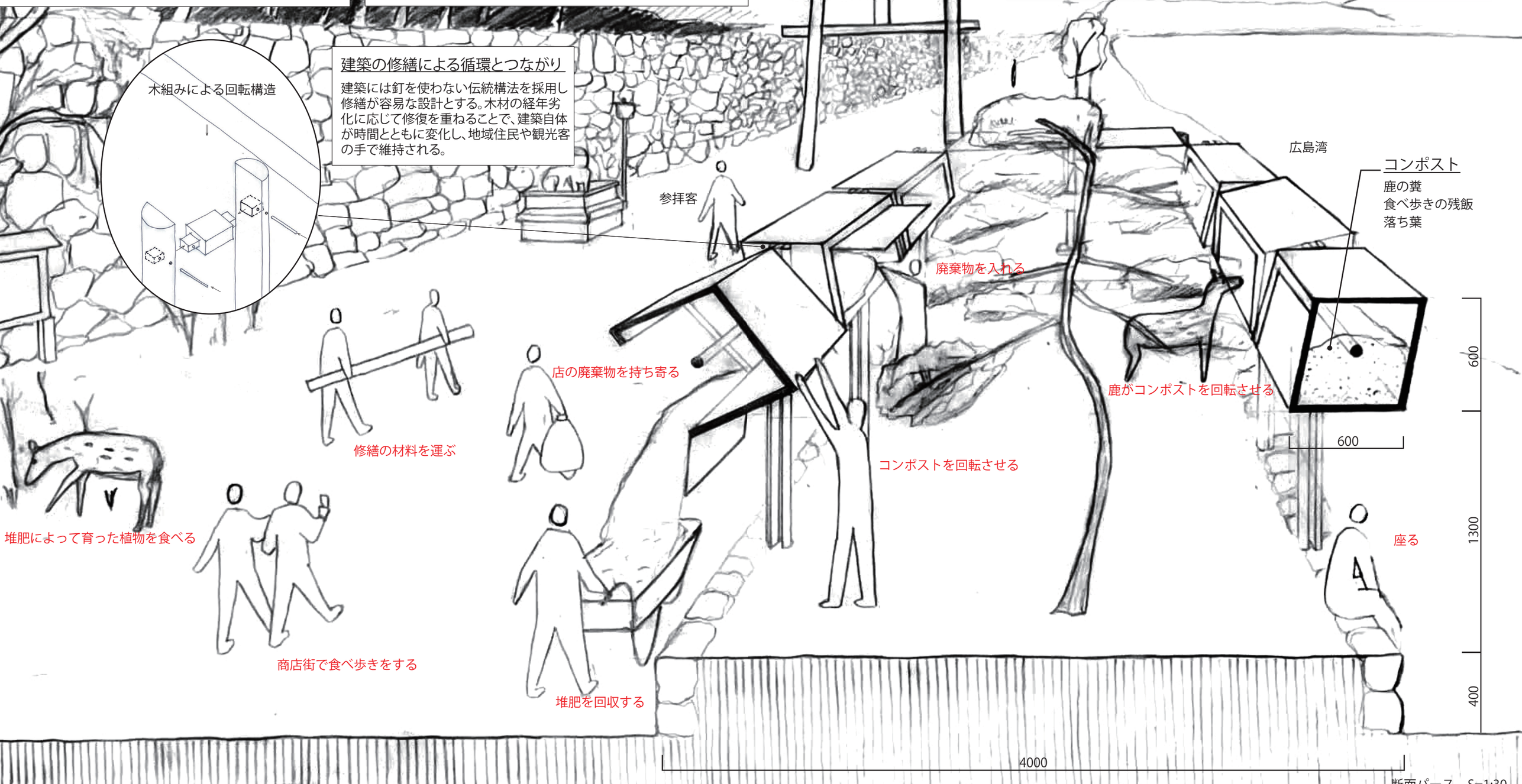
日本は昔から糞尿を肥料として用いる文化があった。
鹿の糞や食べ歩きの残りを回転式コンポストで堆肥化し、栄養豊かな土壌を生成。これにより、鹿の餌となる植物を育て、食物連鎖を回復させる。人が廃棄物処理に関与することで、鹿・環境・観光が持続的につながる。

動物とのつながり

日本は昔から動物との関わりの中で暮らし建築をつくってきた。宮島では鹿が侵入しないために外開きになっている鹿戸などが存在する。今回は鹿の体形に合わせた高さにコンポストを設計することで鹿がコンポストを回転させる。

建築の修繕による循環とつながり

建築には釘を使わない伝統構法を採用し修繕が容易な設計とする。木材の経年劣化に応じて修復を重ねることで、建築自体が時間とともに変化し、地域住民や観光客の手で維持される。



断面パース S=1:30